

「集団登山」の考え方

——山岳会としてその原点に立ち戻って学び直す——

【要約】集団登山では基本的に、登山口から予定の行路をたどって目的地（山頂）に到達し、下山するまでの全行程をメンバー全員で共同行進する。近代登山の幕開けはモンブラン登頂（1786年）からだが、マッターホルンの登頂（1865年）によって本格的なピークハントを目的とするスポーツ登山が切り開かれ、さらに20世紀前半から半ばにかけて国家の威信をかけてヒマラヤの8千メートル峰の登山が盛んに挑戦された。これらのいずれもが集団登山として行われたが、集団登山はもとは軍隊を模して作られた登山スタイルだとされる。まず読図（測量、地形図の作成に始まるルートへの検討）や、行路の探索・偵察が登山に先立って行われた。また、とくにヒマラヤの高所登山では極地法という登山理論に則り、“兵站”や“防衛網の突破”に似た軍事手法が取り入れられてきた（極地法では少数者のみが登頂する）。リーダーがいるのも、軍に司令官がいるのと同じだ。現在、何気なく行われている私たちの集団登山にも、計画を作成し、装備・食料を携帯し、パーティーの安全で円滑な進行を図り、隊としての所期の目標を達成するという、その名残がどこかに残っているのではなかろうか。私たちの登山論を見直してみる参考になれば、との思いで記した。後半では、パーティー（登山隊）としての具体的な留意点や同行者の心得・マナーなどを書きとどめた。

1. 登山はなぜ「集団」なのか

1) 集団登山と単独登山

登山は最も単純には、多人数で行うのか1人で行うのか、という員数の違いで分けられ、前者を**集団登山**、後者を**単独登山（単独行）**と言っています。今回の講習で扱うのは前者で、この形式の登山はどのようなものなのかを勉強します。

集団登山 複数人（集団）で行う登山の方式で、「団体登山」や「組織登山」などとも言い換えられます。本会など山岳会で行う登山はもとより、ガイド登山、ツアー登山、学校主催の遠足登山、市民登山、古来行われてきた講中登山（山岳信仰登山、宗教登山）などがこれに含まれます。しかし、目的・趣旨、組織上の仕組みや隊の編制、メンバーの構成などはそれぞれで大きく異なり、これらの要素を整理すると、集団登山は、

- ①（ほぼ／または形式的に）同格のメンバーで成るもの（構成要員要素）
- ②力量・経験のレベルがばらばらなメンバーから成るもの（要員の無基準・無差別）
- ③役割が多様に特定され、それぞれで異なるもの（役割基準）

——におおよそ分類することができます。山岳会で行われる登山と講中登山は①に、ガイド登山やツアー登山は②に、海外遠征登山は③に分類されますが、これらの「集団登山」には

指揮者（リーダーやガイド、引率者）がいて、メンバーで共通した目標を持ち、ほぼ同一隊列・進路（組織的進行）をとり、共同生活することなどが共通点として挙げられます。

【参考】隊員の資質・力量格差とリーダー責任

山岳会が実施する登山でも、多少なりとも構成員間の体力差・力量差や体格差などがあるのが普通ですが、形式的には同一基準を満たした対等のメンバー構成として想定します。なぜかという、とくに山岳遭難事故が発生したとき、メンバー間の格差は原因として基本的にあってはならないからです。構成員間で明らかな力量・経験格差があつて、それが要因と推測された場合は、その計画自体の的確性と登山実施の是非、責任（担当者と山岳会）が問われるのです。だから、訓練を行つて格差はなくしておいたはずなのです。

山岳会でも未修練者もしくは不適格者を合理的な理由なく（その山に登るだけの適性を欠くのに）難度の高い山に帯同し、事故を起こしてしまった場合は、ガイド登山になぞらえてリーダーの責任が問われることがありうると考えられています（▼参考資料：本多勝一『リーダーは何をしていたか』朝日文庫／溝手康史『登山の法律学』山と溪谷社／山の会 HP「資料館」中「登山における『注意義務』試論—（1）・（2）」。本会は「**山行自己責任**」の原則をとっていますが、手放しでの自己責任論は成り立たないと考えられます。

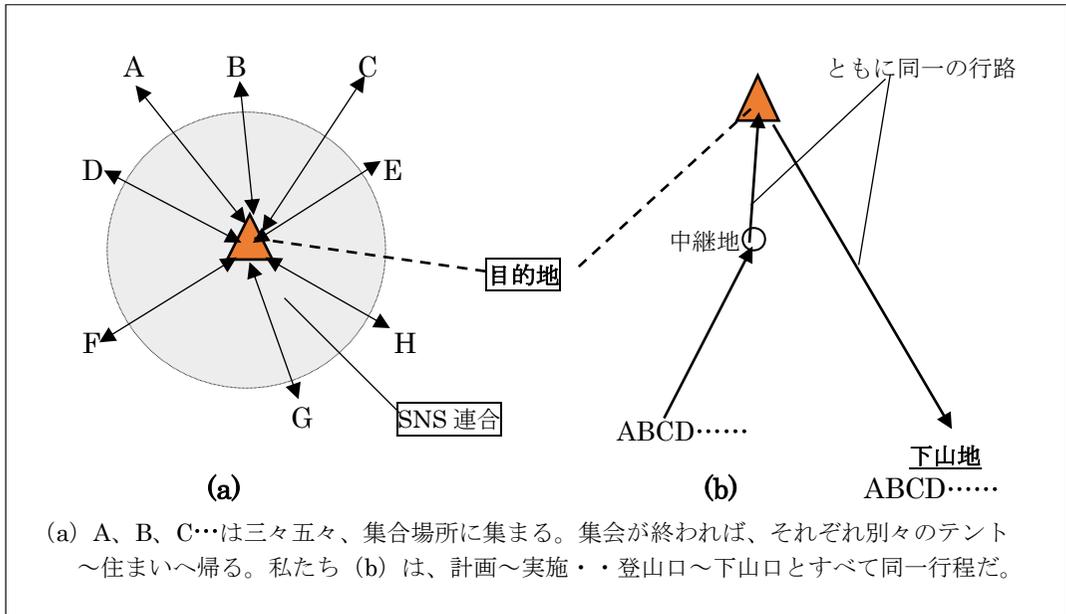
山行対象に対して経験・力量などの面で不適格なメンバーに対しては、現会則でも「不参加を勧告できる」（そうする）ことになっていますが、会としてその勧告権をより強め、また制度化する必要性が最近、意見として上がっています。

集団登山の隊列や、隊列数を示すときは、登山用語で「パーティー」と言っています。実は、隊・隊列・部隊・分隊などの「隊」も英語の“party”（パーティー）もともに、もとは軍事用語で、兵士で編制する軍組織を意味したようです。用語の上からだけでなく、登山隊（とくにヒマラヤ遠征などの大型登山隊）は軍隊を模して編成されたといわれます（後述）。

なお、「遠征 expedition（エクスペディション）」は、「征伐」のために遠方に出かけるという意味を持ちましたが、20 世紀になってヒマラヤなど海外や辺地への遠征登山が確立されたのちは、「（研究・調査の目的も持った）遠隔地への組織立った旅行または登山」をも含む言葉としても使われるようになりました（広辞苑）。大きな組織や国家を背負って登山が行われ、国際化するにつれて、語意にも反映されていることがわかります。

単独登山 集団登山に対して、1 人で行うのが「**単独登山（単独行）**」です。単独行といえば、新田次郎の『孤高の人』の主人公・加藤文太郎（実在の人物）が有名ですが、本会に入会された何人かの方も入会前は単独で登山を行ってきたと聞いています。古来の修験者（山伏）もここに含まれると思われ（単独が多かった）。

単独行者は、すべて自分の処理を誰かの指示を待つことなく自身で行い、その判断と行動に自分が責任を持ちます。問題とされるのが、事故を起こしたときに、手助けをする人がそばにいないことです。またザイルを使うのは通常、危険な局面を進むときですが、複数者では互いに助け合うのに対して、単独者の場合には託す（落下を止めてくれる）相手がいません。参考までに、単独者でザイルを使って垂直に近い懸崖に登る（アルパイン・クライミン



▲若者たちの登山 (a) と私たちの登山 (b)

た関係を引きずっており、その延長線上に成り立つものと考えてきたからです。インターネットを介した SNS の発達があってこそ可能となったのだと思いますが、それにもかかわらず、今も私は、登山におけるメンバー間の真の関係は相互の信頼や仲間感情の上にしか成立しえないと考えています。それでも成り立つのは、若者たちが、そういった感情的な前提や価値観を必要としないのか、それらを重要な要素とは考えず、もっと別の巧みな仕組みや意味を考え出し、登山・山を1つの場面として互いの関係を新たに創出しているからなのかもしれません。下に若者たちにおける仮想現実*仮想現実に言及しましたが、若者たちの関係の形成はそれに基礎づけを持つ、私たちには不可解な人間関係のようにさえ思われます。

◎SNS を介する人間関係や集合機会の創出

現代の若者の傾向として、「集団（登山）」を嫌うというようなことが一般に言われています。SNS やスマホを介して、いつも／いつでも他者とつながっていると認識し、また、つながってみたいと切望する一方、実際にはテントに代表される狭い同一空間での共同の生活は好まない、という相矛盾する特異な性癖*を特徴としているように思います。

石原さんから若者のあり方を聞いたり、若者たちの山でのパーティー（宴会／集会）に参加させてもらい、その模様、山行のしかたなどをこれまで何度か観察してきた限りでは、たとえ複数～多数者が結集して、「団体」「集団」の外観をなしたかのように見えても、実は集団の形成は一時的・一過的で、その場限りにすぎないようなのです。その集団には、集団としての（上に述べたように集団である限りは軍隊としての一側面を帯びますが）実体も核も存在しません。あるとすれば、イニシャチブをとる“幹事”役か旗振り役がいて（山小屋や山の道具店が兼ねることもあるようです）、一方的に情報を発信するだけなのです。発信の受け取り手は多数ですが、あくまで個人の任意の参加に委ねられます。

若者たちは来るも去るも、SNS 連合にとどまるも、意思の自由を根拠とする単一者たちです。複数者が、つながった体裁をなしたようでも、メンバーの代替は可能だし、誰その参加・欠席が全体企画に影響を及ぼしもせず、個々人が1つの所在を示すだけのようであり方から、これはデジタル連合と言えるでしょうか。一方、私たちの集団は、アナログ連合です。

***仮想現実 virtual reality [VR]**：相矛盾する（アンビバレントな ambivalent；同一の対象に対して愛憎という相反する感情を同時に抱く）2つの現実対象を、等価なものとして受容する一方、自分にとって猶予性のある（より都合のよい）決まった片方しか現実には選択しない、倒錯した感覚を特徴とした社会心理学的現象をさすと理解されます。バーチャル virtual という語は本来「名目上はそうでなくても現実上の」という深長な意味なのですが、湾岸戦争（1990-91年）や、アフガニスタンへのアメリカ軍の空爆（アフガニスタン侵攻；2011年～）において、戦闘機（無人機も含め）による爆撃がコンピューターの画面上で操作され、兵士にはゲーム感覚で爆撃が行われたことが、マスコミで非難を浴びました。本人の認識とは別に実在する真の現実！

再び若者たちの山行のことに戻ると、大型のテントを運び上げて共同生活や共同歩行・同時行進をする、私たちが通常行っている一貫した集団でのスタイルとは全く異なっています。参加する個々人は集団に決められた責任や役割は負わない、**個人完結主義方式**が彼ら彼女らのあり方を支配しているように思われます。集中登山とも違ってきます。

〈若者たちの登山の特徴〉

- ①あくまで1人1人が単位となって判断・決定・行動する、自己完結型登山である。
- ②若者たちが複数人集まった場合も、パーティー（宴会）形式の会合に参加するだけであって、パーティーが終われば、テントも食事も生活も個人の単位に戻る。
- ③パーティー参加者に提供したそれぞれの食事やツマミ、飲み物などは、個々人の自主的な好意によるものであり、「共同食」ではない。
- ④テントは基本的に1～2人用であり、調理器具やコッヘルなども個人単位である。
- ⑤おのずから彼ら彼女らは、行路・時間や危険など山行の現実を共有しないし、荷物も分担せず、1つの部隊（パーティー）としての全体企画にも関与しない。
- ⑥部隊全体はもとより、小部隊の指揮者もおらず、1人1人が、山中では個々人として自由に振る舞うだけという、組織の見取り図も統制もない「集まり」である。
- ⑦事の評価や目標達成の成否は、実施してみて結果的に、自分で感じて初めてわかる。

登山とは登山口からスタートして、目的地（山頂）を踏み、下山口（安全地帯）まで戻ってくる全行程をさします。その行程が全構成メンバーで同等に、また同じ責任体系に組み込まれたもの（自他を含めて共同責任を負う）として共有されないような山行は、本来の理解からすると「集団」の部類には入りえません。

ここで私が言いたいのは、若者たちの登山は集団の基本的な概念枠から外れるのに、若者たち自身は「つながっている」（彼ら彼女らにとってはそれが集団と同義）と思っている、その思考は独断的で（＝仮想・虚構）、その登山は集団登山などではない、ということです。「仮想現実」と似ているゆえんです。

■テント泊と小屋泊を組み合わせた“擬制”

また、ちょっと気になった山行スタイルとして、この8月の白馬岳～雪倉岳～朝日岳の縦走登山に参加の意思を示されたImさんご夫妻の未知数の体力が例会で問題視され、お二人だけ小屋泊まりとして本隊から分ける、というやり方が提案、採用されました。

その後、お二人から参加の取り消しが伝えられて、問題は消失したかのように見えますが、一抹の懸念が残ります。私は隊列の体系を分けるこの擬似編制は、基本的に「集団」登山として不適格だと考えているからです。1つのパーティーであればお互いが他のメンバーと隊に対して負担、責任意識を同等に持たなければなりません、宿泊条件・装備条件が異なる以上、メンバーどうしはそうした対等の関係にはなく、共同（協働）者として等列にないため、1つの正統の山行パーティーとして成立しえないと考えています。

何もなく登山が終了すれば問題があらわになることなく過ぎ去るでしょうが、万が一、事故などが起きてしまったら、この編制は間違いなく批判や反省的になります。これまでも、まれに例外的な山行スタイルとして、テント泊組と小屋泊組との組み合わせで1つの山行が行われた事例がありましたが、そのあり方に関して是非や改善案などは検討してきませんでした。今回の事例をきっかけに、会としても考えておくことが好ましく感じます。

ここで述べる「集団」論としては、その山行で対象とする山の評価（難度）をきちんと行うことを前提にしながら、そのうえでなお参加者の適格性に余地を持たせてパーティーとして1つにまとめ切めるのか、参加者の適格性をもっと厳格に考える（会で不参加の勧告をする）のか、のどちらかです。今回は、集団論としてあやふやでした。どちらが組織（集団）論として適切かは、山の難度と集団のあり方と関連づけて考えると、わかりやすいでしょう。

2. 集団登山の成り立ち——その来歴

集団登山は、例えば古代に人々（種族・部族）が集団で定住を始め、自分たちの身の安全を守り、また狩猟や漁労に協力して獲物を獲るために採用した組織の運営方式と同じような意味で、協力して共通の成果を得るためにとる方法だと類推されます。野生でもライオンは群れで協力して獲物を捕らえます。

1) 日本における近代登山の黎明期

登山に話を戻すと、明治期以前には我が国には登山をスポーツや娯楽として楽しむという文化・風潮はなく、もっぱら山岳信仰による宗教登山のほか、林業・山菜取りや、峠を介しての交易目的で“山登り”が行われていたにすぎません。

その後、明治時代に入って、測量や地質・植物調査などの学術目的で山が登られました（測量は廃藩置県後に国家の財政基盤の確立のために地租改正が断行されたのに伴い、農地の測定が大規模に行われた一環として、また中央集権体制の確立・維持の目的で実施されます）。

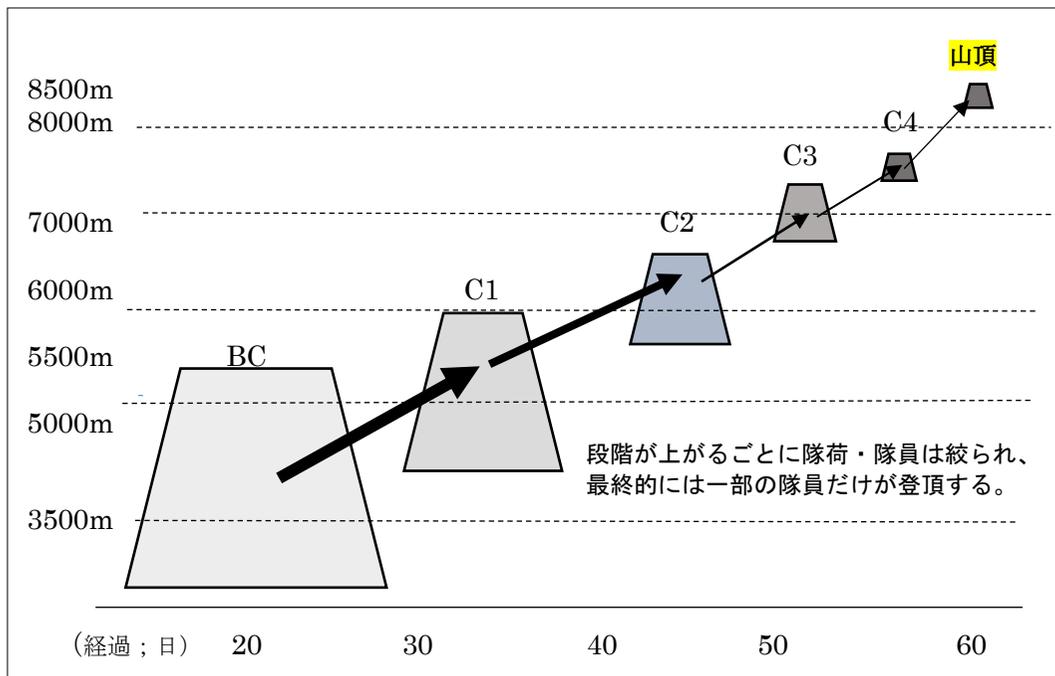
本格的近代登山の幕開けは、文明開化が進んだ明治末期（1900年前後）で、イギリス人宣教師のウォルター・ウェストンによって西欧式の登山として導入されました。彼によって北アルプスの穂高連峰や槍ヶ岳などが次々に登頂されます。同時に時代を反映して、日本人にも登山に目を向ける風潮が醸し出され始め、小島烏水^{うすい}を初代会長とする日本山岳会がそのころ創立されました（1905年）。大学の山岳部も次々と誕生します。

こうした黎明期の日本アルプスの登山は、登山道もなく、単独でなしうるのは不可能で、その土地と山をよく知る山案内人と荷役人を伴って入山しました。『劔岳 点の記』（新田次郎）では、軍命を帯びた主人公（柴崎芳太郎）が劔岳の山頂に立つのに、複数の案内人と多数の荷役人を伴った場面が生々しく描き出されています。いずれも集団登山でした。

2) ヨーロッパでの近代登山の幕開け

ヨーロッパで近代登山の幕開けを告げたのは、ヨーロッパアルプス最高峰のモンブラン（ヨーロッパ圏最高峰はウクライナのエルブルース）の初登頂（1786年；ミッシェル・ガブリエル・パッカーら）でした。古来、アルプスの高峰は「悪魔の住む地帯」と言われ、人が登る対象などとはみなされなかったのです。そして、それから実に80年という時代が下がり、イギリス人エドワード・ウィンパーによって1865年にマッターホルンが初登頂されました。この登山を境に、近代～現代の登山にまで続くアルピニズム（アルプスを登攀するスタイルによる登山方式）の幕が切って落とされたとされます。マッターホルンは人が登れる山などとは従来みなされませんでした。この登山ではザイルやピッケルなどの近代装備が駆使され、また7名がザイルでつながった隊列を作り、登頂を果たしました（しかし下りで4名が滑落死、ザイルが切れたおかげでウィンパーら3名が助かります）。

モンブラン登頂からマッターホルン登頂までの80年という長い期間は、激しい市民革命と急激な産業革命が並行して起こった時代で、さまざまな分野が市民に開放され、開明的な文化・文明に多くの市民が浴することができるようになった時期に当たっています。このような宗教、旧階級の支配機構（アンシャンレジーム）からの解放、市民社会の創生などが背景となって、登山界にも大きなパラダイム転換が起こります。スポーツとしての登山（山頂



▲極地法のパターン

を踏むピークハントを目的とした冒険登山；本多勝一の言う「パイオニア・ワーク」が一層の発展を遂げます。これを機に、**海外遠征 expedition** という新たな登山のジャンルも誕生します（海外遠征登山を最初に行ったのはウィンパーでした）。領邦国家から中央集権的な近代国家への移行とともに、国家を背負った遠征登山が盛んに行われるようになります。

ヨーロッパ列強による帝国主義的な植民地の領土分割がほとんど終わった 1900 年以降、まだ踏査されていなかったインド北西部～中東の地理的な測量・探索が各国（とくに英仏独）により行われるようになり、その中でヒマラヤの高峰が明らかになっていきます。ヒマラヤの登山はそのような時代状況の末、登られます。19 世紀末から試みられていたヒマラヤ登山でしたが、ジョージ・マロリーのエベレスト遠征と遭難（1922 年）を経て、1950 年にモーリス・エルズバーグを隊長とするフランス隊によって 8 千メートル峰の一角、アンナプルナが最初に陥落します。次いで 1953 年にはエベレストがヒラリーとテンジンによって登られ、遅れて日本隊が 1955 年にマナスルに登頂するなど、ヒマラヤ登頂ラッシュが続きます。

いずれも大規模の隊列を組み、多数の現地人をポーターとして雇い、物資の運搬、キャンプの造営など山での生活圏域を上へ、上へと運び上げる極地法がとられます。これは、軍事上の“**兵站**”**を模していると考えられます。ちなみに、西欧列強は植民地支配・侵略に現地人を傭兵として雇う政策をとっており、この政策が極地法で現地人がポーター（荷役人）として使用された原型になったのではないかと私は考えています。

* * 兵站：作戦軍のために、後方において馬匹・軍需品の前送・補給、後方連絡線の確保などに任ずる機関（広辞苑）。作戦軍とは登頂組をさすと考えれば、登山にもよく当てはまります。

高峰に登り尽くされ、物量に物を言わせた極地法への批判も手伝って、新たな未踏峰へ、そしてより困難なルートからピークを、と少人数で登る短期速攻型の登山（アルパイン・スタイル）が志向されるようになります。メスナーはその代表格の登山家です。

3. 集団登山で留意すべき事項

ここからは、私たちの集団登山（会山行）での隊列のあり方、リーダーのあり方、参加メンバーのあり方、さらには登山を行うに際して安全をどう確保するか、また、なんとなく決まっているようでそうでない山でのマナーなどについて具体的に紹介します。

1) 登山パーティー

① 隊列を組む：普通、一列縦隊が基本で、先頭をサブリーダー、最後尾をリーダーが歩く（決まりがあるわけではない；バリエーションルートなど難路の進行では SL と CL が逆に位置することもある）が、リーダーが適宜、順番を指示する。隊列の乱れ（隊員間の距離の開きや複数列、指示した順番の不遵守）には後方から気を配るが、先頭も時々、後方を振り返り、ペースのとり方に注意しながら歩く。明らかな隊員間の開きが生じたときは、歩速を緩めるか、一度停止などの号令をかけ、隊列の修復を促す。

隊員間に開きができにくい編制とは、最初に遅い人（遅く歩ける人）の後に速い人を配置し、以下、遅い人と速い人とを交互に配置する方法である（数人単位で遅い人と速い人がままとまったときに、開きはできる）。また、遅い人＝弱い人、速い人＝強い人と考えるなら、弱

い人に1人ずつ強い人を付けるこの組み合わせ編制が、安全面でも有効なように思われる。さらに、上りと下りとでは、隊員間の開き方には違った注意がCLには必要だ。

(最後尾) リーダー・・・速い人-遅い人-速い人-遅い人 (先頭) → **進路**

② 休憩のとり方 (時間配分): 一定の時間ごとに短時間の休憩をとる。歩き始めは衣類の調整が必要なこともあるので、30分後くらいに1回目の休憩をとる。以降は約50分歩行で10分弱の休憩をピッチとする。このクール(組み合わせ)を「1ピッチ」と言う。とくに上りでは、「あと何ピッチ」で着くかの目安になる。休憩場所は危険がなく、安定した、ある程度隊員が休憩できる平坦地が好ましい。季節や天候によって、日照地や木陰などを選ぶ。

休憩は先頭のSLまたはCLがはっきりと指示する。1ピッチごとでなくとも、要請があったときは、柔軟に休憩を入れるが、隊列の進行を念頭にした判断が必要である。

休憩でザックを外すときは、置き場所にも注意したい。お花畑などが登山道の近くまで分布する場合には、植物のあるその場所から遠ざけた地点とする。

③ 歩き方、その速さ: 速い人を先頭につけてはいけない(登山が失敗しやすい)。また、自分が速く歩きすぎているという自覚のない人が先頭に立つのも困る。パーティー構成では(単独行のときもそうだが)、先頭は歩速が速くなるのが常だということを承知したうえで、大胆に遅く歩くのがある場合がある。

パーティーとしての歩き方の要点は、脱落者が出ない歩速まで落とす、ということである。つまり、いちばん遅い人に歩速を合わせるようにする。隊列全体の速さは、どのような隊列としようとも最遅の人に一致するので同じだが、最初に先頭が速い人で引っ張られると、後続の弱いメンバーに同行者意識・協力姿勢が殺がれてしまうことがあり、登山としてうまくいかない原因になることがある。つまり、精神的な連帯感を維持するうえにも、歩く速さを決める役割者(先頭)には、特段のデリケートな配慮が必要になる。

初めは遅くとも、そのうちに元気を出し速くなるメンバー(スロースターター)がいる。歩き始めてから数ピッチ後に、そのパーティーとしての歩速に落ち着くものだ。

④ 危険の喚起: 先頭は危険を最初に感知する者であると同時に、感知しなければならない、その任務を負った者でもある。神経を研ぎ澄ませながら先頭は務めるべきである。行く手に危険を感知したときは、その手前(安全地帯)で一度立ち止まり、後続のメンバーに危険の存在、危険の中身、注意して通過すべきことを手短かに伝える。進行は「ゆっくりと」が基本だ。先頭以外でも、危険を感知した場合には、適宜、危険を喚起するために、声をかけることが必要だ。ただし、場所を考慮し、危険地帯の真ただ中にいるときに声を出すのは、むしろ危ない。できるだけ早めに危険箇所の喚起は行うべきである。怖がりの人や未経験者が危険地帯にいた場合には、かえって恐怖心を誘発するおそれがある。

⑤ 交差(行き違い)、追い越しと追い越され: 登山パーティーの様態で、その山岳会の品位さえわかると思われる。十分に気をつけたい。とくに下りのとき、下から登ってきたパーティーに出くわしそうになったら、登山道上の広めの場所を見つけて早めに停止し、上りの人たちに、「どうぞ」というサインを送ろう。「上り優先の原則」と言っている。これは、上りの人のほうが労力として大変なこと、下っている人のほうが周囲(とくに下部)の状況が

視覚的によく把握されていること、上からの落石の可能性があることといった理由からだ。それでも「お先にどうぞ」と言ってくれれば、お礼の言葉をかけて下のようにしたい。逆に、上りで道を譲られたら、「ありがとうございます」「すみません」をお忘れなく。

また道を譲る場合は、よほどのことがない限り谷側によけてはいけない。もし交差（行き違い）するときに、相手のザックがぶつかるなどして、自分たちが事故に遭ってしまったら、それは何よりも自分自身に辛いことだし、相手を加害者にする罪作りにもなる。

⑥体調・状態の相互観察と支援：体調の管理は個人の責任に帰せられるものだが、先日の飯豊山登山の下山でみられた畑さんにおける熱中症と思われる症状など、本人で感知できていない場合があると言われる。「危ない」「変だ」と感じたら、それを感じた同行者が言語化することが大切だ。装備の装着の間違い、登山手法の間違いや、ザックの偏りなど、その場で指摘してあげるようにしたい。状態の悪いメンバーに対しては、体力にゆとりのあるメンバーが積極的に荷物を譲り受けるなど、適宜、協力姿勢が大切だ。

2) リーダー（チーフリーダー）、サブリーダー、隊員（メンバー）

①チーフリーダー（CL）：「当該山行の計画の段階から下山に至るまでを担当し、山行途上での指示・決定などを行う。」（会則第9条3項）、「事前に山行への参加者に山行の安全のために情報の提供を行うとともに、必要な準備などについて励行を求めることができる。」（同6項）とあり、その登山を成功させるための総合的な指揮を執る立場の者である。**リーダー特権**といわれる特有の権利が付与されるとされ、上に述べた軍隊を模した登山のあり方からすれば、戦略・戦術面での単一の指示体系に全体をまとめるという重要な役割がある。ただし、「指示・決定は同行者の意思を尊重して行われなければならない。」（同3項）と濫用を戒めている。選択が分かれる場合の判断は、SL、Mの意見を聞いたうえでCLが行う。

②サブリーダー（SL）：「リーダーを補佐し、またリーダーがその機能をなしえなくなった場合に代行する。」（同3項）。通常、CLから相談があったときでなければ、自分の意見を先んじてCLに述べることはない。山行が問題なく終了すれば、特段の役割もないが、CLに対して自主的な協力姿勢は適宜、示すべきであろう。

③参加メンバー（隊員；M）：組織構成上、参加メンバーは「兵卒」と考えるとわかりやすい。普通は上官の命令には歯向かわない存在として想像されるが、登山においては必ずしもそうではない。例えば、隊列の進行の速さが速くて付いていけないというときや、どこか体調不良が個人的に発生したとき、あるいは沢登りで危険地帯の通過時などに恐怖感が湧くことがあったときは、ザイルを出してもらうなど、そのときどきで対応を求めるべきである。

一方、進路のとり方（ルートを選択や変更）など隊列全体の統制にかかわる側面に関しては、求められない限りMが先走って意見を言ったり提案したりするのは、慎むべきである。行路の選択はリーダーの判断に委ねるとの見解を、Mは終始持つておくべきである。ただし、先頭が行路（ルート）間違いを起こしたような場合は、早めに指摘してよい。

登山の負担度という意味では、CL、SL、Mの違いはなく、すべての構成員がMであり、同等に荷は背負うような仕組みに本会ではなっている。しかし、体調などにおいて予想外の事態に見舞われたMに対しては、CLばかりの指示によるのではなく、他のMが考慮したあり方も交えた、不調者にとって思いやりのある対応をとることが望ましい。